

巻頭言

科学と価値

Science and Value

特任教授 一般教養（哲学） 山本 道雄

科学と価値の関係は古代以来現代に至るまで、西洋の科学の歴史を語る場合、無視しては通れない問題である。それは西洋にはキリスト教という強力な価値体系があったからである。ブレイクの「天地創造の図」に象徴されるように、神によってこの世界が創造されたというのが、この規範体系の第一命題である。この命題によれば世界の隅々まで神の摂理が染みこんでいるだろう。宇宙の中心が太陽であろうと、地球であろうと、我々の日常生活には支障がない。しかしそうともいえない時代もあった。進化論によって生物界における人間の特権的地位が揺らいだとき、多くのキリスト教徒にはこれは受け入れ難いことだった。なぜなら精神において人間は神の似姿を宿し、他の生物・無生物に対して優越的地位を有するからである。現在でもアメリカの一部では進化論も現代宇宙論も否定し、宇宙が「インテリジェントデザイナー」である神によって創造されたと信じているグループもある。

1960年代末にアメリカで成立したバイオエシックスもまた科学と価値のせめぎ合いのなかにある。そもそもこれは被験者の権利・尊厳・安全の確保という倫理的要請から発している。医療技術の急速な展開によって従来の倫理や法体系では対処できない問題が続出する。人工呼吸器の発明によって人の死についての再定義が求められるに至ったのはなお記憶に新しいところだ。伝統的な心肺基準が価値中立的であったのに対して、全脳死や大脳死には悩ましい倫理問題がつきまとっている。ユダヤ教徒は全脳死を認めない（アメリカはニュージャージー州の「良心条項」！）。大脳死がキリスト教的価値規範に親縁的であることは一部の大脳死論者自身も認める。のみならず日本では脳死概念そのものにキリスト教的価値を嗅ぎつけこれに反対する論者もかつてはいた。

しかしより現代的な問題として人胚性幹細胞研究がある。一個の人格に成長しうる受精卵を破壊するが故にこの研究には慎重な倫理的配慮が求められた。しかしこの難問は山中教授のiPS細胞の樹立によってブレイク・スルーされたようだ。iPS細胞樹立は科学史のダイナミクスを如実に伝えるものとして、実に印象深い出来事である。ところで最近久しぶりに興味深い記事に出くわした。中国の科学者達がゲノム編集の技術によって受精卵を操作し、その研究成果を欧米の科学誌に発表しようとして掲載を拒絶されたというニュースである（日本経済新聞、2015年、5月18日）。これは血液難病の原因となる遺伝子変異を直すのが目的の研究であるが、このゲノム編集は次世代に受け継がれる生殖細胞に手を加えることになり、聖域侵犯として拒絶された。当然だろう。可能なことは実現に移さないではおかないというのが、科学者のデーモンだ。このデーモンを抑えるのが倫理（価値規範）である。それがいかに無力であるかは科学史の示す通りである。しかし今回はこの出来事が中国の科学者によってなされた点に、私は格別の興味を引かれた。欧米の科学者であれば多分踏みとどまったのではないかと。彼らは法律によって厳しく制約されている。なぜなら彼らには生命や人格に対する特有の価値規範意識があるからだ。そのルーツのひとつは世俗化したとはいえおそらくキリスト教だろう。ところが中国文化は世俗的であることをもって特色とする。あの孔子先生は怪力乱心について語らないのである。

では日本の研究者はどうか。我々もまた不語怪力乱心の精神に近いところにいるのだろうか。17世紀は江戸時代、当時の傑出した政治家であり儒学者でもある新井白石がイタリア人宣教師シドッチを尋問した事件は、この点で興味深い。白石は物理、地理、天文、医学、博物学に関するシドッチの博識に驚嘆する。それらは日本の知識人に知られていないことばかりだった。興味を抱いた白石はシドッチに、汝の国の宗教はどのようなかと尋ねる。ここぞとばかり宣教師は天地創造、イエスの死後再臨、終末期死者復活について、つまり怪力乱心の世界について、恍惚として語る。儒学者が宣教師の雄弁にどのように反応したか、語るまでもあるまい。この男は科学については博学の士であるが、宗教に関しては殆ど痴呆である、一人の人物においてなぜかとも異質なものが共存しているか。これが白石の解きたい疑念だった。しかし西洋の科学はこの共存を背景にして成立したことを白石は知るよしもない。地球生還後に宣教師になった宇宙飛行士のいたことをご存じだろうか。かくも美しい地球が偶然の産物ではありえず神の創造によるのに違いないというのが、その動機だった。このような感覚を白石の子孫である我々に求めることはおそらくできまい。我々の場合デーモンを封じ込めるのは、宗教ではなく、やはり倫理教育である。